

江藤淳と〈転向〉論の帰趨

山崎, 正純
大阪府立大学教授

<https://doi.org/10.15017/8912>

出版情報 : 語文研究. 100/101, pp.124-136, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

江藤淳と〈転向〉論の帰趨

山 崎 正 純

昭和三〇年を前後する時期、文壇には石原慎太郎、大江健三郎が登場し、論壇においては江藤淳、橋川文三が新進の論陣を張り、丸山眞男、竹内好が左翼の理論敗退後の思想構築を唱えていた。理論から思想への転回は、戦前の社会主義リアリズム論争の幾度目かの反復であったといつてよい。すなわち、昭和史における転向軸の思想的意義を、非転向軸固有の理論から切断されたところで、いかにして構築するかという課題である。

本稿は、この時期の論壇に見られた現象面の幾つかを取り上げ、その背後を支えた転向論的視角を摘出する。主として江藤淳の思考に焦点化した論述となるが、まずその前提として、昭和三〇年代初頭の「昭和史」論争に反心した丸山眞男の問題意識の検討から始めたい。

I 「昭和史」論争と丸山眞男

遠山茂樹・今井清一・藤原彰の共著『昭和史』（岩波新書一九五五年十一月刊）をめぐる「昭和史」論争は、昭和三〇年代の初頭にあつて、科学としての歴史学すなわち唯物史観・階級闘争史観によつて描き出された昭和の動乱を、その記述から排除された民衆の、動揺し忍苦し絶句する姿そのものによつて批判する亀井勝一郎の「現代歴史家への疑問」（『文藝春秋』一九五六年三月号）を契機として巻き起こつた論争であつた。この中で亀井はこう述べている。

歴史とは人間の歴史だ。あたりまえの話である。様々な人生の歴大な累積であつて、歴史に入りこむとは、人

間性の微妙さに直接ふれることであらう。そこには善人もおり悪人もいる。どちらとも判別出来ないえたいの知れない人間もいる。この意味で歴史家とは人間の研究者であり、人生探求家でなければならぬ。(中略)あらゆる矛盾の認知であり、断定し難いところで迷うそのすがたが、史書の一つの魅力となるのではないが。皇国史観も唯物史観も、迷いのない歴史ばかり氾濫させたのではないか。(「現代歴史家への提言」)

亀井はここで、天皇制ファシズムと日本共産党との二項対立分類の、史観としての「迷い」のなき、「人間の微妙さ」に触れることのない類型的叙述に疑義を呈しているのだ。二つの史観の中間にあつて、なおかつ歴史に翻弄された大多数の「国民」はどこに在るのか、と。

『昭和史』を読んでみると、戦争を強行した軍部や政治家や実業家と、それに反対して弾圧された共産主義者と、その双方だけがあつて、その中間にあつて動揺した国民層のすがたは見あたらない。つまり「階級闘争」という抽象観念によって二つに分類限定し、そこに類型化が行われたのではないかということだ。(「同前」)

亀井のこのような発言が、一九三二年から三四年にわたつて行われた社会主義リアリズム論争、すなわちプロレタリア文学理論とそれへの不信感から発せられた大衆的動向への意識転換との対立の反復的変奏として行われていることは確かである。林房雄、亀井勝一郎、徳永直、貴司山治などによって提出されたこの論議について、吉本隆明は「作家同盟の解体直後におこなわれた社会主義リアリズム論議は、これを転向論議のなかに包括することができる。」(「近代批評の展開」一九五九年五月)と述べているが、昭和三〇年代初頭における亀井の一連の「史観」批判は、昭和史のなかに転向者をどう位置づけるかという転向者亀井勝一郎の問題意識として、妥協しえぬ論点であつたと思われる。

この点についての判断を下す前に、しばらく亀井の第一批判「現代歴史家への疑問」に対する遠山茂樹の応答を次に見ておこう。

私は、基本的には、二七年テーゼ、三二年テーゼの上に、歴史批判の立場を求めたい。軍部を先頭にたてた支配者の戦争政策に対して、平和を守る戦線は、共産党を核とする以外にはありえなかつた。というのは、日本共産党は、満州事変前から、戦争勃発とそれが第二次大戦

へ拡大する必然性を指摘し、戦争反対を一貫して主張し実践してきた、唯一の政治組織体であったから、満州事変のおこる四年前、一九二七年のテーゼは、中国への侵略戦争がすでに実質的にはじまっていること、および日本と英・米、とくに米国との正面衝突が必至となるであろうことを警告していた。この見透しは、おどろくほどの確であった。

(「現代史研究の問題点——昭和史」の批判に関連して——)

「見透し」の「的確」さは、しかし「第二次大戦へ拡大する必然性」への有効な組織的抵抗に結びつくことなく崩壊したのではなかったが、敗戦後に復活した日本共産党の抱える最大の課題として、まさにこの理論信仰と組織論的限界とを内在的に批判し得る視角の欠如があったはずである。

遠山によるこの応答は、『中央公論』一九五六年六月号に掲載された。その翌月の『中央公論』七月号に、亀井による再批判が掲載され、そのなかで遠山の日本共産党信仰、理論信仰に対して次のような表現で亀井自らの疑問を表明している。

日本における共産主義、具体的には日本共産党とは何

であったか。コミンテルンの日本問題に関するテーゼは果して正当であったかどうか。政治勢力としては国内で微弱であったにしても、現代史を動かす一方の巨大な思想であったことはたしかだ。肯定否定のための対決は、現代にとつて必至であろう。私は転向とは本質的には、類型化された思想からの脱出と思っているので、別の思想へ転向して別の形で類型化するのを転向とは思っていないのだが、これは正当であるか。

(「歴史家の主体性について」)

亀井のこの文章は、前半における理論信仰批判と、後半の転向論とに分かれている。前半においては日本社会のトータルな理解としてのコミンテルンテーゼの妥当性を問い、そのことよつて後半、すなわちその後の大量転向の原因が日本社会の教条主義的な類型的理解の脆弱さにあったのではないかという疑問へと連結されていく。

「昭和史」論争の展開過程において、亀井の提起したこの二つの問題は、論争そのもののその後の進展とは別のルートで継承され、昭和三〇年代のボレミカルな言説の地平を用意したものと考えられる。遠山の「現代史研究の問題点」とそれへの批判として書かれた亀井の「歴史家の主体性について」

が出たところで、まず丸山眞男が「日本の思想」を書くことで、この論争の問題の核心が、近代日本の理論信仰（マルクス主義の日本における思想的意義）と、日本型転向（思想継起の仕方）の二つであることを論じた。すなわち丸山は、亀井の提起した疑問に触発されて、この論文を書いたと思われるのである。

亀井勝一郎が「コミンテルンの日本問題に関するテーゼは果して正当であったかどうか。」と述べたことによつて、「日本における共産主義 具体的には日本共産党」の問題として、丸山は次のように書いたのであった。

本来、理論家の任務は現実と一挙に融合するのではなくて、一定の価値基準に照らして複雑多様な現実を方法的に整序するところであり、従つて整序された認識はいかに完璧なものでも無限に複雑多様な現実をすつぱりと包みこむものでもなければ、いわんや現実の代用をするものではない。それはいわば、理論家みずからの責任において、現実から、いや現実の微細な一部から意識的にもぎとられてきたものである。従つて、理論家の眼は、一方厳密な抽象の操作に注がれながら、他方自己の対象の外辺に無限の曠野をなくし、その涯は薄明の中に消え

てゆく現実に対するある断念と、操作の過程からこぼれ落ちてゆく素材に対するいとおしみがそこに絶えず伴っている。この断念と残されたものへの感覚が自己の知的操作に対する厳しい倫理意識を培養し、さらにエネルギーにシユに理論化を推し進めてゆこうとする衝動を喚び起すのである。（『日本の思想』）

岩波講座『現代思想』第十一卷（一九五七年十一月刊行）の巻頭論文であつたこの一篇は、その後岩波新書『日本の思想』（一九六一年十一月刊行）に収められて、幅広い読者によつて読み継がれることになる。その受容のされ方には、戦後民主主義のリーダー、リベラリスト丸山眞男の鮮やかな日本文化論という期待の地平が大きく影響していたことは間違いない。が、仔細にその文章をたどつてみれば、遠山茂樹のマルクス主義への信頼（理論信仰）に対して、転向者亀井の上げた批判の声（「そこには善人もおり悪人もいる。どちらとも判別出来ないえたいの知れない人間もいる。」）を思想史学の言葉でとらえようとする志向性が顕著であることがわかるだろう。「操作の過程からこぼれ落ちてゆく素材に対するいとおしみ」と丸山が書くとき、遠山茂樹のマルクス主義への信仰は、「理論家みずからの責任」を放棄したものと見な

されており、『昭和史』の記述から排除された転向問題こそ、近代日本の思想を問う本質的な視点であることが確認されたのだといえるのである。

亀井は「転向とは本質的には、類型化された思想からの脱出と思っているので、別の思想へ転向して別の形で類型化するのを転向とは思っていない」と書くのだが、これは「皇国史観も唯物史観も、迷いのない歴史ばかり氾濫させたのではないか」（前掲文）という亀井自身の提起する疑義に呼応するものである。一般的には後者（唯物史観）から前者（皇国史観）へのコンヴァートを転向と呼びならわしているわけだが、亀井の定義に従えばこのようなコンヴァートは転向とは見なせないことになる。いわばこのタイプの転向は、日本人の精神構造に固有の思想受容のパターンに過ぎないのであり、転向が真に精神的な危機を潜り抜けることであるとするとすれば、亀井の定義する転向のあり方こそ、転向というにふさわしいものと言えるはずである。しかし、その意味での転向は日本人の精神構造から見ても、極めてまれなことであり、むしろそうした精神の本源的な危機を招来する思想として、マルクス主義はあつたはずなのだが、そのような思想が日本化される過程で、理論信仰が生じ、現実の動向との緊張関係が失われていったのである。「制度の物神化」（「日本の思想」と

丸山が言うのはそのことであり、よく知られた「思想受容のパターン」について論じた次の一節なども、日本型転向の典型の抽出と、亀井の定義する転向との落差を際立たせようとする、ボレミカルな論述として読むべき箇所だと見ることでよい。

過去に「摂取」したものの何を「思い出」すかはその人間のパーソナリティ、教養目録、世代によつて異つてくる。万葉、西行、神皇正統記、吉田松陰、岡倉天心、フイチテ、葉隠、道元、文天祥、パスカル等々々、これまでの思想的ストックは豊富だから素材に事欠くことはない。そうして舞台が一転すると、今度はトルストイ、啄木、資本論、魯迅等々があらためて「思い出」されることになる。（中略）それはその都度日本の「本然の姿」や自己の「本来の面目」に還るものとして意識され、誠心誠意行われているのである。（「日本の思想」）

再度ここで亀井による転向の定義に立ち戻れば、「万葉、西行」の系と「資本論、魯迅」の系がイデオロギーとして排斥的な関係にあることは明白であつて、それにもかかわらず一方から他方への双方向的な反転が「誠心誠意行われ」と

いう日本の精神風土においては、類型から類型への移行がそこにはあるのみであり、「類型化された思想からの脱出」がいかに稀有のことに属するかが了解されるのである。すなわちそのことは、日本型の転向が、主観的には「誠心誠意行われ」るものである以上、日本人の転向をその心理的自己了解の面から類型化することには意味がないということでもある。

丸山眞男の「日本の思想」はこのように、亀井勝一郎の転向者の弁の内側に日本近代の社会思想（とりわけマルクス主義）のねじれへの不信を聴き取り、そこを立脚点として日本型転向の特性を抽出して見せたものであった。丸山の論理構成が、転向論を従来 of 倫理的裁断批評から形式論的モデルの抽出へと学問的に移行させるものであったことは明らかであり、そのことの意義は計り知れないほど大きいのだというべきである。しかしながら、丸山の分析の手法が、「昭和史」論争の対立関係をそのまま引きずっていることもまた事実であって、みずから抽出した日本型転向のモデルに対してなぜ？を發すること、すなわち、亀井の定義する転向を阻んだ現実的な要因にまで踏み込んだ分析が、結局不十分なものに終わっているといえるのである。

しかしいずれにしても、丸山は「昭和史」論争の中に転向者の声を聴き取り、この論争を転向論の文脈に置き換えた。

このことを改めてここで確認しておこう。以後、昭和三〇年代の論壇をその現象面の背後で支えたのは、まさにこの転向をめぐる問題構成であったと見られるのである。

II 江藤淳と転向論

『文学界』（一九五八年六月号）には、「日本文学の夜明け」という総タイトルの下に、橋川文三「実感の文学を超えて」、江藤淳「神話の克服」の二編が並んでいる。「日本文学の夜明け」というタイトルが、昭和三〇年代前半の論壇の現象面を表現するにふさわしいものであったということそれ自体が、いかなる問題の系として当時新進の二人の批評家にとらえられていたのだろうか。江藤淳は次のように述べて、昭和三〇年代初頭の文学状況を、戦前の転向と結びつけ、その類似性を強調している。^{注30}

現象的にいえば現在の日本がやや病的なほどの「文芸復興」期にあるという結論である。このことは、かつてマルクス主義文学が敗退し、文学者がいつせいに「転向」した直後、具体的には昭和十年代の前後について用いられたことがあるが、当時の極度にロマンティックな

風潮を思わせるものが、最近のわれわれの周囲にはびまんしている。社会的に見ても、小田切秀雄氏が戦後のマルクス主義運動の挫折のあとにあらわれた非政治主義的傾向を「戦後転向」と呼んだことを考えあわせると、ほぼかつての「文芸復興期」と同様の条件があるといつてよいかも知れない。

（「神話の克服」）

「日本文学の夜明け」はマルクス主義的社会思想の崩壊のあとにやってくる。政治的アパシーとして、それはやってくるのだ。だが江藤はその崩落後の状況を、あえて「ロマンティック」と表現してみせるのである。石原慎太郎、大江健三郎、三島由紀夫、井上靖の当時ベストセラーズに数えられる諸作品について江藤は、「そこに共通している傾向は、作中の人物における生活不在であり、現実逃避的傾向であり、ある種の稀薄さ、リアリティーの不在である」と述べ、そのうえで「これらの作品の魅力をささえているものが、リアリティーとしてではなく、ひとつのムードとしてとらえられた強烈な危機感だということにも注意する必要がある」という。問題はこうして、昭和史に反復的に出現する転向の周辺に焦点化されることになる。マルクス主義に代表される社会思想によって文学にリアリティーが付与される一方で、世界観を明瞭に提

示するそうした思想の崩落の後に残るものとして、「強烈な危機感」と一体化した「ある種の稀薄さ」が常にそこにあるということに江藤淳の奇立ちがあり、江藤の目前でまたしても反復される同時代の「文芸復興」のありように、江藤は近代文学を否定する「神話的象徴」（「神話の克服」）を見出すのである。

橋川文三は、竹内好、小林秀雄、丸山眞男の三者を軸に、彼等の文章の一節をそれぞれ引きながら、昭和文学の「解決」の無さを強調する。

「日本文学はいつも外へ向つて新しいものを待つている。いつても希望がある。脱落したり、妥協したりして、個人がふりおとされていつても、希望だけは残る。…魯迅のような絶望はうまれなかつたし、うまれるはずもない。したがつて、それを理解することはできない。」

したがつて、竹内の意は、つねに希望があるという絶望的事態（それを国情といつてもいい）の中で、どのような美学的可能を創り出すか、という点にかかると。小林はそれに答えていう——美しい「花」がある、「花の美しさ」というようなものはない、と。それは小林という個体とともに亡ぶべき「断念」のメタフィジックであった。

丸山はいう。――「雑居を雑種にまで高めるエネルギー」
（この文脈にいいなおせば、それは、文学的リアリティ
の創出ということだ）（中略）は、「認識としても実践と
してもやはり強靱な自己制御力を具した主体なしには生
れない。その主体を私達が生み出すことが、とりもなお
さず私達の『革命』の課題である」と。

見られるように、問題はつねに「花」にかえり、「主
体」「私達」にかえる。解決はないといつてよいのだ。

ここで橋川が述べていることは明らかだ。日本文学の本質
としての一種のアスピレイション（魯迅の絶望と決定的に相
容れざる性質であることはいうまでもない。）を、美学的形
象に転化するルートとして、小林の「花」と丸山の「主体」
の二つのルートしか持たない日本近代文学の貧困である。

「花」と「主体」の相補関係をいうまでもなく、小林と丸山
との関係が、「講座派のそれを思わせるア priori な近代主
義」（「実感の文学を超えて」）の二つの亜種に他ならないと
いうことに、近代日本文学の「解決」のつかない「絶望的事
態」があるというのである。橋川は竹内好を根拠に、同時代
の文学に見られるリアリティ喪失という事態の背景にある
『実感』＝『日常経験』の美学（同前）を否定する。そし

て橋川は結論として「戦争」を例にとり、次のように述べる
のである。

戦争はもはや私どもの「日常経験」の中にはない。し
かし、その大殺戮が現実にあったことは想像力のある（！）
人間なら唯一人も否定しないであろうし、そのでいどの
想像力を抜きにしては、いかなるリアリティの構成もあ
りえない。それはただ「文学」や「実感」の素材になら
ないだけでありたとえば大江の「想像力」の素材にはな
っていないものなのである。

このようにして橋川は、日本近代文学の近代性の「絶望的」
悪循環を指摘し、大江健三郎の「想像力」論（それがサルトル
ルからの援用であるとしても）に日本型近代の「伝統」を断
ち切る可能性を見ようとしていることがわかる。そしてこう
した橋川の立論には、やはりあの転向論とのつながりをそこ
に見ることができるのだ。すなわち、魯迅の「絶望」を理解
しない日本文学の近代性の骨格に「講座派のそれを思わせる
ア priori な近代主義」があり、「個人がふりおとされてい
つても、希望だけは残る」という日本近代文学の奇妙なアス
ピレイションを指摘するところに、蔵原惟人の文学理論の挫

折、あるいはその後の社会主義リアリズム論争によって非転向軸に加えられた切断線（転向軸）を重ね合わせることでできるのである。

橋川文三の評論「実感の文学を超えて」は、併載された江藤の「神話の克服」と比較して、論点の整理、結論の説得力の点で江藤論に及ばないが、これ以後の江藤に大きな影響を及ぼした論点があることを看過できない。橋川論にそって既に言及したことが重なるが、江藤にとってこの橋川論が提示した「つねに希望がある、という絶望的事態（それを国情といつてもいい）の中で、どのような美学的可能を創り出すか」という問題は、その後一九六二年、ロックフェラー財団の招きで渡米し、翌年プリンストン大学で教鞭をとり、一九六四年に帰国するまで、日本文学の構造的探求の視座として、江藤がそこにこだわり続けたものであったと思われるからである。

『群像』（一九六三年六月号）に掲載された「近代日本文学の底流」^{注4}は、「一九六三・三・二七／米國ペンシルヴェニア州フィラデルフィアにて」江藤が講演した原稿の邦訳（訳者は江藤自身であることが、注によって明らか）である。江藤はこの中で、永井荷風、谷崎潤一郎、横光利一、中野重治の名を挙げ、「青年時代に西欧の新文学の『紹介者』——むしろ

その体現者と目されていたわが国の代表的作家の多くが、おおむね三十代の後半か四十代のはじめ頃までに、青年時代に熱中していた西欧思想に背を向けて、十年ほど前そこから颯爽と出発しようとした旧き日本に、卒然と回帰して行ったというところ」を取り上げて、「何故にかような『回帰』、あるいは『転回』が、かくもしばしば日本の作家を見舞うのでしょうか」という問いを立てるのである。

江藤は日本の近代作家に共通するのは、「不可欠の何ものかの不在からひきおこされる、その何ものかを回復しようとする耐えがたいほどの渴きだ」と述べて、「西欧文芸思潮」であれ「江戸」「日本」「村」といった、かつて否定したはずの「観念」であれ、日本語という言葉の生命から遊離した「観念」にむかってこの「渴望」は食指を伸ばすが、いずれ「観念」は言葉を萎えさせ、その生命を裏切るに至って、再び作家は「観念」を捨て言葉を選びなおすときが来るのだと江藤は述べる。さらに江藤は、「日本浪漫派」が、これまでくり返してのべて来たあの「渴望」に完全な表現をあたえた唯一の文学グループだった」と述べ、「彼らの作品の文体は、ほとんどつねに異様な混乱の印象を与えます。これはおそらく文学的完成を『渴望』の表現のために犠牲にしてかえりみなかった結果でしょう」と推断している。

彼ら（日本の近代作家——引用者注）はそれを日本の「外」に——おそらくは西欧の觀念のなかに求め得ると信じた。またあるときには、自らの内におそらくは日本の過去に見出し得るだろうと考えました。しかし、そのいずれにも求めるものが見出せぬことがあきらかになったとき、彼らはむしろ渴望の化身となろうとした。そして「日本浪漫派」の場合のように、「渴望」の吐露のためには自己確認の唯一の手段——芸術的完成をも捨ててかえりみない、ということころまで行こうとした。（中略）日本人が日本人として正當に生きるためには、どうしても回復されなければならぬと人々の感じている「何ものか」に対する「渴望」こそは、明らかに近代日本文学の基調音をなすものだといいことです。

（近代日本文学の底流）

橋川文三が「つねに希望がある、という絶望的事態（それを国情といつてもいい）」と述べたことと、江藤がここで「しかし、そのいずれにも求めるものが見出せぬことがあきらかになったとき、彼らはむしろ渴望の化身となろうとした」ということは、あたかも獲物を見失った飢えた蛇身の、のたうつが如き狂気の相貌を、あえて「希望」「渴望」と表現す

るその屈折において共通する。「日本浪漫派」こそ、日本近代文学の狂気の蛇体の姿そのものだど江藤は言っているのだ。だが、にもかかわらず江藤は、この「渴望」によってこそ「日本文学は西欧文学の圧倒的影響の下に近代化して来た」とそれを肯定し、賛美するのである。いわば「つねに希望があるという絶望的事態」という橋川（ないしは竹内好）の認識を逆手にとつて、日本文学の「渴望」＝「希望」の機能面に限定した肯定論を展開しているといつてよいだろう。

佐藤泉は江藤が滞在中の「米国では日本近代化論のプロジェクトが進行していた」とし、とりわけ江藤が滞在したプリンストン大学は日本型近代化パターン研究の拠点であったことを指摘している。佐藤は米国における「近代化論のまなざし」について次のように論じる。

近代化論は「近代化」と「西欧化」の同一視を批判す

る。だがそれは自らを文明として提示しつつ殖民地を支配した西欧中心主義に対する反省というわけではない。

第二次大戦後の米国が後進国の近代化に開発を政策として打出したのは、冷戦対立下での国際環境形成にむけたヘゲモニーの観点からである。近代化論登場の背景には、日本とソ連の近代化の進行があり、近代化はこの新しい

型の近代化の登場によって個別西欧社会の性格ではなくなつた。そこで普遍的な概念規定が必要になつたのだが、この学問的要請は、超学問的動機に支えられていた。共産主義拡大の阻止を国是とする米国にとつて、東欧アジア、さらに独立を果そうとする第三世界各国が今後どのような「近代化」の路線を進むかに無関心ではいられない。そこで日本とソ連の二つの近代化の型が研究課題として構成され、そのうち日本型モデルを魅力的な物語として構築する必要があつた。

(「治者」の苦悩——アメリカと江藤淳)

つまり日本は「アジア」儒教文化圏の近代化を方向付ける有力なモデル（佐藤 前掲文）として「低開発国の手本」（同前）となるべく、その近代化のプロセスが抽出されなければならぬのであり、それによって第三世界が台頭しつつある国際社会における米国のヘゲモニーを強固たらしめ、「西欧中心主義」をアジアの手本たる日本が支えなければならぬのだ。そのためには、渡米以前に書かれた「神話の克服」によって江藤自らが確認した、反復される「転向」とその後を訪れる「現実逃避的傾向」「リアリティの不在」「強烈な危機感」等々の顕著な症候を、一挙に抹消してしまうよう

な論理が編み出されなければならなかつたはずだ。こうして「転向」は「渴望」に姿を変え、「リアリティの不在」等々は「観念」の悪戯であり、「言葉」の選り取りによって、それら深刻な症候は容易に克服されるものとされたのである。江藤が繰り返し述べているように、その「渴望」が究極的に何を求め、何を回復しようとするのであるのか「私自身、この「何ものか」が何であるのかはよくわか」らないとされる。

いわば永遠の空虚にむけて狂気となひ交ぜになつたかの如きロマンティズムが、日本の沼地から立ち昇つていく。それが永遠に空虚な何かであるとすれば、転向概念はそもそも成立のしようがない。「観念」への立ち昇りと、「言葉」への回帰だけがそこにおいては繰り返されるのであり、回帰は上昇へ向けての準備でしかないとはいえるだろう。

講演「近代日本文学の底流」が佐藤の指摘する「米国のヘゲモニー戦略のコンテクスト」（同前）に加担するものであることは確かである。「近代化論は「近代化」と「西歐化」の同一視を批判する」（佐藤 前掲文）が、江藤もまた正確にそのコンテクストをなぞっている。

日本文学は西欧文学の圧倒的影響の下に近代化して来たが、かならずしも西歐化されて来はしなかつた、とい

うことでしょう。もしこの「近代化」と「西欧化」の間に横たわる基本的な相違を日本の作家たちがはっきりと自覚しはじめるようになれば、日本の作家は今までよりも自由に、自信をもって語れるようになり、真の自己認識に到達できるのではないかといいたい気もします……

おそらくこの時、江藤の中で「日本浪漫派」の性格規定が一変したのだ。「反体制性」「急進性」「無理心中の論理に似た奇妙な宿命論的ニヒリズムと、それと裏腹な急進主義」「神話の克服」は、「反『近代』」的であるばかりでなく、「反『封建』」的でもあり、したがって反『前近代』」的ですらある（同前）ような「絶対的な現状の変革」（同前）を夢想する狂的なロマンティズムではなく、日本文学の樂天的で個性的な「第三世界」的アスピレイションにその姿を一変させたのである。

注

注1 「昭和史」論争における亀井勝一郎の発言と、その延長線上で執筆された批評文は、一九五七年に二冊に纏められ中央公論社から刊行された。その後一九五九年に新書版（中央公論社）として版を改めて刊行されている。新書版の「後記」に「今度単行本にまとめるに当たって私は全面的に推敲し、改めて

注2

筆を加えた箇所も少なくない。しかし論争になった部分は、そのまましておいた。後で私自身不十分だと思った点もあるが、当時の在るがままの状態を示すことで、読者諸君の検討を期待したかったからである。」とある。本稿での亀井勝一郎からの引用は、この新書版を底本として用いた岩波現代文庫『現代史の課題』（二一九五年五月刊）に拠った。

注3

吉本隆明は「今月、すくなくとも二人の新人批評家が、現在の文壇、文学作品のマス化現象にとり組んでいる。橋川文三『実感の文字を超えて』、江藤淳『神話の克服』（以上、『文学界』六月号）が、それである。両者とも、構想が熟していないためか、かなり論旨が繁雑であるが、今月第一等の力作である。」と述べ、橋川や江藤の論調には、今日のマス文化現象が、たんに、もとも現実社会の危機的な動向に動揺しやすいハイパー・クラス（中産階級）の局部的（全クラスからは）な現象であるにもかかわらず、これをトオタライズしてムード化する誇張があるが、両者にある俊敏な文学思想的抵抗意識は、新人のみが示しうる意欲に充ちているということが出来る。」と評価する。（『今日の思潮』『世代』七月号、一九五八年七月刊『全著作集 第十三巻』に「情勢論」として収載）

注4

「註1」として「これは、元来、『Neglected Topics in Japanese Literary Criticism』と題して、The Association for Asian studies Meetingで発表された論文の邦訳である。邦訳にあたって題を改めたのは、原題が学会関係者のつけてく

注5

れた仮題だったためで、他意があるわけではない。」とある。

引用は『江藤淳著作集2』（講談社）に拠った。

佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー——近代を記憶する場』

（岩波書店 二二 五年八月刊）第一部第三章から引用。初出

は『治者』の「苦悩」（『現代思想』一九九九年五月号）。

（やまさき まさすみ・大阪府立大学教授）